

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00088

研究課題名（和文）近代日本における「メディア宗教」の研究 大正期求道者たちの言説分析を中心に

研究課題名（英文）Historical Studies of "Media Religion" in Modern Japan: Discourse Analysis of Seekers around the Taisho Period

研究代表者

赤江 達也（AKAE, Tatsuya）

関西学院大学・社会学部・教授

研究者番号：30823819

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、「メディア宗教」という視点から、明治末期から大正・昭和期にかけて既成教団の外で「宗教的なもの」がメディア（主に書籍や雑誌などの出版メディア）と結びつきながら展開していく過程を明らかにした。

本研究を通して、「教団的宗教性」の内外に広がる「拡散的宗教性」 修養・教養・道徳などと近似した、個人的かつ分散的な宗教信仰のあり方を歴史的かつ理論的に把握することで、近現代日本の「宗教的ランドスケープ」を総体的に描き出すための基盤を整備した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大正期には、教団的な「宗教」には収まらない「宗教的」言説が大量に書かれ、読まれるようになる。「新宗教」の宣伝や批判、修養論・人生論・健康論といった多様な「宗教的」言説の大量流通がはじまっている。その社会的な広がりや歴史を「メディア宗教」という理論的視点から具体的に解明した点に、本研究の学術上の意義がある。

伝統教団の「正統的」教義には収まらない「宗教的」言説が、独立系宗教家によって活字メディアで発信され、読者たちによって大量に受容される。こうした「メディア宗教」的な状況は、現代の宗教やスピリチュアリティにも通じるものであり、近現代日本の宗教的・文化的状況を理解する上で重要な意義を持っている。

研究成果の概要（英文）：In this research, through the perspective of "media religion," we clarified the process of development of "the religious" and publishing media, such as books and magazines, that were produced outside established religious institutions and communities from the late Meiji to early Showa period.

Through this research, we illustrated the history of "diffusive religiosity" (personal and decentralized forms of religious belief, similar to self-cultivation, education, morality, etc.) that spreads within and outside of "denominational religiosity" both theoretically and concretely. We also prepared a foundation for comprehensively depicting the "religious landscape" of modern and contemporary Japan.

研究分野：社会学・宗教学・思想史

キーワード：宗教雑誌 メディア 大正 求道者 宗教家 仏教 キリスト教 宗教文学

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

宗教とメディアの関係に関する先行研究では、宗教教団の宣伝布教活動が注目されてきた。これらの研究は教団組織の発行する雑誌に主眼を置いているため、教団に所属していない独立系宗教家の宗教雑誌や宗教的言説の検証は不十分であった。また、従来の研究の多くは明治期の検証が中心であり、大正期に活発化する多様な宗教的言説の爆発的な増大については十分に考察されていない。

先行研究がいわば「明治期における宗教教団のメディア利用」(宗教メディア・教団メディア)の研究だとすれば、本研究は「大正期に活発化する、メディアに依存した宗教的言説実践(=メディア宗教)」の研究である。本研究では、大正期を中心に宗教・言説・メディアに生じた転換の経緯や実態を、「メディア宗教」という視座から解明する。具体的には、明治後期から昭和戦前期にかけて「求道者」「独立系宗教家」等と呼びうる教団未満のアクターがどのように出版活動を行い、どのような宗教的言説を発信し、いかなる宗教思想運動やネットワークを形成していたのかを解明しようとした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、大正期に生じた宗教的言説実践と活字メディアの関係を解明することである。大正期における「宗教的」言説のなかには、既成教団外の宗教家たちによる膨大な刊行物があり、それらを受容する読者層が存在していた。ただ、そうした「宗教的」言説は、しばしば通俗的かつ非正統的な性格ゆえに学術的検討の対象から外れやすく、保存されにくい傾向がある。それらは大正期に広く一般化したことで、かえって忘れられてしまうのである。本研究では、教団外で宗教的言説を発信していた雑誌や書籍を発掘・検証し、大正期の「メディア宗教」的状况を復元する。その作業を通じて、近現代日本における「宗教的ランドスケープ」を総体的に描き出すための基盤を形成することをめざす。

3. 研究の方法

明治末期から昭和戦前期に既成の教団の外で活動した求道者・独立系宗教者が刊行した活字媒体(雑誌・書籍・小冊子)について、以下の三つの作業を行った。

第一に、独立系宗教運動のメディア実践の検証。主な対象は、キリスト教系では、内村鑑三・塚本虎二・矢内原忠雄ら無教会伝道者、および三浦閑造。仏教系では、石丸悟平、山中峯太郎。また、「折衷」志向型の宗教家として、松村介石、西川光二郎、西田天香を検討した。

第二に、発行・販売体制・発行部数等の基礎的情報の収集および雑誌記事タイトル等を整理した目録の作成。

第三に、各雑誌の宗教思想の特徴や変遷の分析。「折衷」志向型の宗教思想と「真宗／キリスト教／神道／その他」を横断する言説状況の解明。

4. 研究成果

本研究では、明治後期に生まれた「求道的・超宗派的な精神性」の延長線上で、大正期に出現した「メディア宗教」的状况の広がり多様性について、「純粹」志向型と「折衷」志向型という宗教思想の二つの極から明らかにした。

なお、その詳細を記す前に、共同研究の活動形態に触れておきたい。本研究の期間は、新型コロナウイルス感染症の流行と重なり、図書館等での資料収集・調査は計画通りには進まなかったものの、オンライン会議システムを活用することで、関連領域の研究者との活発な意見交換を行うことができた。研究会を計15回、公開研究会を計5回開催し、「出版」「新宗教」「ジェンダ

一」といった「宗教とメディア」に関わる諸テーマに関して、社会学・宗教学・メディア史・デジタル人文工学の研究者と討議した。こうしてオンライン上での研究交流を活性化することで、研究代表者と研究分担者が密接に連携しながら共同研究を遂行することができた。

研究代表者の赤江達也は、「メディア宗教」における「純粹」志向型の代表的な事例として、無教会キリスト教の系譜を検討した。無教会キリスト教は、内村鑑三にはじまる宗教思想運動である。不敬事件（1891年）後にキリスト教著述家として成功した内村は、1900（明治33）年に雑誌『聖書之研究』を創刊する。そして、その雑誌と集会（聖書研究会）を主な活動基盤として、既存の教団の外部で伝道を展開した。内村は自らの立場を「無教会主義」と呼んだ。そのため、内村の周囲に形成された信仰共同体は「無教会」「無教会運動」「無教会キリスト教」等と呼ばれる。赤江はこの無教会を対象として、主に四つの論点に関して研究を行った。

第一に、無教会キリスト教を「メディア宗教」の観点から検討することで、無教会運動が「教団外」的な活動形態において「メディア宗教」の代表的事例であること、プロテスタント・キリスト教の「正統的」信仰を徹底しようとする「純粹」志向の事例であることを明らかにした。内村鑑三は、制度教会・教団から距離を取り、プロテスタンティズムにおける「信仰のみ」の原則を徹底しようとした。その「教団」批判と宗教的「純粹」志向は、日露戦争後に登場する教養主義的なエリート青年を魅了した。一高・帝大の学生が内村の門下集い、「柏会」や「白雨会」を形成し、塚本虎二・黒崎幸吉・南原繁・三谷隆正・矢内原忠雄のような無教会派の伝道者・知識人が輩出されていく。このような内村鑑三の影響圏を検討することで、世紀転換期から大正期かけての「教会外のキリスト教」の広がりを描き出すことができた（『キリスト教会の外へ』『シリーズ近代日本宗教史2 国家と信仰——明治後期』春秋社、2021年）。

第二に、大正期の「メディア宗教」的な状況のなかで、内村から弟子たちへの継承過程のなかで「無教会主義」という宗教思想が「体系化」されていったことを明らかにした。内村鑑三は批評的な著述家であり、「無教会主義」を体系的に論じたわけではない。むしろ内村の弟子たち（無教会第二世代）のほうが「無教会主義」を体系的な近代宗教思想として受容している。つまり、「無教会主義」は内村鑑三の思想だが、その弟子へと継承される過程で次第に体系化されたようなのである。そこで、1910年代から1920年代に内村と弟子たちのあいだで生じた「無教会主義」の継承と体系化の過程の検討を行った。その成果が「『無教会主義』の波紋——内村鑑三から塚本虎二へ」（『現代と親鸞』46号、2022年）、「内村鑑三と塚本虎二はなぜ分離したのか——宗教思想運動における継承の問題」（『アジア・キリスト教・多元性』第21号、2023年）等である。これらの論文では、内村鑑三の「後継者」と目された塚本虎二を中心に検討し、内村の思想が「無教会主義」という体系的な思想として受容・継承される過程を明らかにした。同時に、無教会主義の「純粹さ」という理解自体も、無教会運動の継承過程で強化されることを示した。

第三に、無教会キリスト教とナショナリズム思想の関係を検討し、第一次世界大戦が重要な転換点であることを明らかにした。無教会第二世代の「無教会主義」では、「純粹なキリスト教」と「日本的キリスト教」という二つの理解が並存している。その並存を可能にしているのは、ナショナリズムにほかならない。そこで、無教会における「キリスト教ナショナリズム」の思想とその系譜を検討した。その成果が「内村鑑三と「二つのJ」——キリスト教ナショナリズムの系譜」（『思想』1179号、岩波書店、2022年）、「無教会キリスト教とナショナリズム——南原繁から考える」（『思想』1160号、岩波書店、2020年）等である。これらの論文では、①内村は生涯にわたって「二つのJ」という標語を語っているが「日本的キリスト教」を唱えるのは1920年以降であること、②内村のナショナリズム思想は「明治のナショナリズム」というよりは「大正のナショナリズム」であり、とくに再臨運動と第一次世界大戦を経た後の「日本的キリスト教」の

主張が重要であること、③南原繁・矢内原忠雄・塚本虎二といった無教会第二世代の主要人物が「無教会主義」を「日本的キリスト教」として受容していることを明らかにした（「戦時期のキリスト教」山口輝臣・福家崇洋編『思想史講義【戦前昭和篇】』ちくま新書、2022年）。

第四に、大正期以降の無教会主義と「宗教的教養」の結びつきを、塚本虎二とその聖書翻訳を対象として検証した。1930年に内村鑑三が亡くなった後、「ポスト内村」時代の無教会運動を牽引していったのが、無教会伝道者・新約聖書学者の塚本虎二である。塚本は「口語訳」新約聖書の先駆者であった。1931年から「試訳」連載を開始し、1944年にはいったん訳了するのだが、戦後も改訳を続け、岩波文庫『新約聖書 福音書』（1963年）などを刊行している。この塚本訳の岩波文庫『福音書』は現代でも読まれ続けており、キリスト教と教養主義の結びつきを象徴する一冊である。同書を起点とする論文「新約聖書を語りなおす——塚本虎二による口語訳プロジェクト」（関西学院大学キリスト教と文化研究センター編『ことばの力——キリスト教史・神学・スピリチュアリティ』キリスト新聞社、2023年）では、塚本による「口語訳」新約聖書が、近現代日本の聖書文化に占めていた先駆的な位置を明らかにした。同時に、塚本の新約聖書翻訳が、無教会主義と教養主義の結びつきを示すものである一方、そこにはキリスト教と教養主義の緊張関係も内包されていることを示した。したがって、塚本虎二を検討することによって、近代日本における「宗教的教養」の歴史をさらに解明していくことができるはずである。このような課題が明確になったことも「メディア宗教」研究の重要な成果である。

分担者の大澤絢子はまず、大正初期に既成教団外で活動していた宗教家（西川光二郎、宮崎虎之助、木村秀雄）の妻たち（西川文子、宮崎光子、木村駒子）による女性運動（新真婦人会）における宗教的言説の分析を行った。その成果は、「妻たちの女性運動と「宗教的なもの」——初期新真婦人会を中心に」（『真宗総合研究所研究紀要』38号、2020年）として発表した。大正期は、彼女たちのようにさまざまな宗教を独自に解釈し、自由に発信する者が続々と現れており、三人が拠りどころとした「宗教的」な思想はいずれも、既成教団の教義ではなく、儒教とキリスト教、仏教と神道、さらに催眠術と神秘主義を合わせた、折衷型の「宗教的なもの」だった。思想や教義に違いがあっても連帯可能だったのは、既成教団の組織や教義理解の枠を超えた「宗教的なもの」を通じた精神の向上という点で結束できたためと考えられる。女性解放にあたり、女性の覚醒と神秘的力を説く点は、平塚らいてふも同様であり、禅を通して彼女が体験した精神的な高揚感、女性の自我確立と身体への権利を主張する契機となった。考察を通して、初期新真婦人会の思想や活動も、既成宗教の枠にとどまらない、近代的な精神性の発露と位置付けることができた。

次いで、石丸悟平の宗教運動（人生創造運動）の実態検証を行い、その成果を「人生論と宗教——石丸悟平の人生創造運動」（『世界仏教文化研究論叢』第59号、2020年）として発表した。石丸は、大正中期から戦後にかけて45年もの長期にわたり、個人雑誌『人生創造』を通して宗教的な人生論を発信し続けた作家である。ここで明らかとなったのは、①メディア、②読者ネットワーク、③仏教という石丸の人生創造運動の三つの柱である。石丸は出版体制を整備し、積極的に雑誌購読会員による支部結成を推奨、会員を集めて仏教講座や夏期合宿、参禅会、定期講演会を開催し、会員同士の交流も盛んで、地域ごとに連盟が結成され、各連盟の機関紙も刊行されていた。『人生創造』には、読者から寄せられた恋愛と性欲、宗教に関連する悩みへの回答と、それらをテーマにした論稿が掲載されている。定期購読者（会員）の年齢は20代が中心で、昭和6年の段階で全国のほとんどの師範学校に支部が開設されたほか、大学内の仏教青年会の会員も多かった。「メディア宗教」の特徴を有する石丸の宗教運動は、寺院の外だけでなく内側にも波及したという二面性がある。石丸の活動は、僧侶ではない人物を寺院が仏教講座の講師とし

て登用したり、著名人が語る教祖像を教団が受容したりする現代日本の仏教の様態にも繋がる。

石丸の宗教的人生論や運動は、主体的な人格向上や精神向上の営みである修養の一つと考えることができる。修養は、明治初期にイギリスの著述家サミュエル・スマイルズによる *Self-Help* の翻訳『西国立志編』（中村正直訳）において、*culture* や *cultivation* の翻訳として使用されて以降、近代日本人の自己形成にとって重要な考え方となっていく。明治二十年以降、形式的な教育に対し、個人が主体的に精神面を高めていく考え方として、宗教と関わりながら論じられていった修養の実践者たちの多くは学歴エリートではなく、働くノン・エリートであり、彼らは社会的成功を目指し、上昇欲求を抱えて修養に励んだ。大衆雑誌『実業之日本』で働く青年に処世論を説き続けた新渡戸稲造らが牽引した修養は、伝統宗教とも結びつき、企業道德の基盤にもなっていく。その過程において、松村介石や西田天香などの折衷型の宗教家や、宗教思想運動との関わりも見出せる。修養は、明治三十年後半に生まれた新しいタイプの青年たちが抱える事情を土壌とし、同時期に興った新しい思想・宗教・社会運動や出版文化の担い手となっていく。それら多くは、伝統宗教と関係を持つものや、それらと関係しつつも特定の宗教の枠には収まらない「宗教的なもの」だった。明治中期以降に普及した修養は、教団外の「宗教的」な言説と関わりながら、会社での働き方や経営理念、人材育成や社員研修、さらには自己啓発など、近代日本社会で働く人々の持つべき精神性となっていく経緯が明らかとなった。この成果は『「修養」の日本近代 自分磨きの150年をたどる』（NHK出版、2022年）として刊行した。

その他、大衆作家・吉川英治の親鸞像と日本主義との関係を検証してその成果を共著として刊行したほか（『近代の仏教思想と日本主義』法蔵館、2020年）、山中峯太郎の親鸞論の検証や、親鸞と日蓮をめぐる各教団の機関紙上の言説と教団外の書籍（小説を含む）・雑誌における言説比較を通して、教団未満のアクターによる出版活動や宗教的言説の実態を捉えることができた。

以上のように、本研究では、大正期を軸に、明治後期から昭和期にかけて既成教団外で「宗教的なもの」がメディアと結びついて展開していく過程を、「メディア宗教」という概念を用いて提示した。日本近代社会には、教団に属する宗教家だけでなく、教団の外で個人的かつ独創的に宗教を語る書き手が数多く存在してきた。とくに明治後期以降、制度化された宗教組織（教団）よりも雑誌メディアに重心を置いた、ゆるやかな宗教運動（または宗教類似現象）が同時多発的に登場している。これらの独立系宗教家や宗教運動は、思想的にはキリスト教やユニテリアン、浄土真宗などから派生した「求道的・超宗派的な精神性」を引き継いでいた。その系譜は、一方では内村鑑三と無教会主義者たちのような「純粹」志向の宗教思想運動として展開され、他方では仏教とキリスト教といった複数の宗教・宗派的な伝統を混ぜ合わせるような「折衷的」な求道論・修養論へと展開していく。さらに、これらの系譜は「修養」や「教養」、「宗教的教養」等のかたちで、戦後そして現代へとつながっていく。つまり、大正期に顕在化する「メディア宗教」的な状況は、現代的な宗教性やスピリチュアリティの歴史的起点であり、世俗的かつ「多宗教的」な現代社会のあり方を理解するための鍵なのである。

本研究では、「教団的宗教性」の内外に広がる「拡散的宗教性」——修養・教養・道德などと近似した、個人的かつ分散的な宗教信仰のあり方——を歴史的かつ理論的に把握することによって、近現代日本の「宗教的ランドスケープ」を描き出すための基盤を整備することができた。同時に新たな課題として、「メディア宗教」的な状況で男性宗教家が前景化する一方で、女性の信徒・読者や協働者の存在と活動が不可視化されていく様態がみえてきた。このようなジェンダーの不均衡は「メディア宗教」の解明に不可欠の課題である。そこで、2023年度以降は「大正期の宗教的教養とジェンダー」という視点から、「メディア宗教」をより総体的に把握するための共同研究に取り組んでいく（研究課題 23K00080）。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計20件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 大澤 絢子	4. 巻 第19号
2. 論文標題 「書評 Richard M.Jaffe, Seeking Sakyamuni: South Asia in the Formation of Modern Japanese Buddhism」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『日本仏教総合研究』	6. 最初と最後の頁 119-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大澤 絢子	4. 巻 第39号
2. 論文標題 「妻帯する親鸞 近代日本の僧侶妻帯論」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』	6. 最初と最後の頁 29-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 野呂 靖・内手 弘太・大澤 絢子・亀山 隆彦	4. 巻 第60集
2. 論文標題 「日本における仏教文化と聖者像に関する総合的研究」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『世界仏教文化研究論叢』	6. 最初と最後の頁 41-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 赤江 達也	4. 巻 第53号
2. 論文標題 「塚本虎二から考える 平和主義・愛国主義・戦争責任」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『内村鑑三研究』	6. 最初と最後の頁 36-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤江 達也	4. 巻 第19号
2. 論文標題 「(非)宗教的なものの宗教社会学 キリスト教と神道の間」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『フォーラム現代社会学』	6. 最初と最後の頁 60-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤江 達也	4. 巻 第1160号
2. 論文標題 「無教会キリスト教とナショナリズム 南原繁から考える」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『思想』	6. 最初と最後の頁 72-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大澤 絢子	4. 巻 第59号
2. 論文標題 「人生論と宗教 石丸梧平の人生創造運動」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『世界仏教文化研究論叢』	6. 最初と最後の頁 168-187
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大澤 絢子	4. 巻 第38号
2. 論文標題 「妻たちの女性運動と「宗教的なもの」 初期新真婦人会を中心に」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『真宗総合研究所研究紀要』	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大澤 絢子	4. 巻 第29号
2. 論文標題 「演じられた教祖 福地桜痴『日蓮記』に見る日蓮歌舞伎の近代」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『近代仏教』	6. 最初と最後の頁 29-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤江 達也	4. 巻 第46号
2. 論文標題 「「無教会主義」の波紋 内村鑑三から塚本虎二へ」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『現代と親鸞』	6. 最初と最後の頁 172-186
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤江 達也	4. 巻 第1179号
2. 論文標題 「内村鑑三と「二つのJ」 キリスト教ナショナリズムの系譜」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『思想』	6. 最初と最後の頁 6-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤江 達也	4. 巻 第21号
2. 論文標題 「内村鑑三と塚本虎二はなぜ分離したのか 宗教思想運動における継承の問題」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『アジア・キリスト教・多元性』	6. 最初と最後の頁 23-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大澤 絢子	4. 巻 第30号
2. 論文標題 「書評 Michihiro Ama著 The Awakening of Modern Japanese Fiction: Path Literature and an Interpretation of Buddhism」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『近代仏教』	6. 最初と最後の頁 253-256
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大澤 絢子	4. 巻 135巻8号
2. 論文標題 「修養ブームが生み出した潮流：近代日本の自分磨き」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『中央公論』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤江 達也	4. 巻 9月号
2. 論文標題 「無教会と皇室」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『図書』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤江 達也	4. 巻 第61号
2. 論文標題 「三つの「二つのJ」 内村鑑三による社会の記述」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『日本の神学』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤江 達也	4. 巻 第776号
2. 論文標題 「[本・批評と紹介] 弟子の手による内村鑑三の 自伝 斎藤宗次郎編著 児玉実英・岩野祐介編 『復刻・DVD版 内村鑑三先生の足跡』」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『[月刊]キリスト教書評誌 本のひろば』	6. 最初と最後の頁 20-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤江 達也	4. 巻 第779号
2. 論文標題 「【出会い・本・人】教会なき人のための聖書 塚本虎二と標準読者」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『[月刊]キリスト教書評誌 本のひろば』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 赤江 達也	4. 巻 第29号
2. 論文標題 「書評 大谷栄一『近代仏教というメディア』」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『近代仏教』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤江 達也	4. 巻 第29号
2. 論文標題 「ポスト戦争責任論の試みと課題〔『近代の仏教思想と日本主義』合評会記録〕」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『近代仏教』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 大澤 絢子
2. 発表標題 「性に悩む親鸞像の形成 近代日本における歴史研究と文学の相関」
3. 学会等名 第80回日本宗教学会、オンライン
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大澤 絢子
2. 発表標題 「「演じられた教祖 福地桜痴『日蓮記』に見る日蓮歌舞伎の近代」
3. 学会等名 第29回日本近代仏教史研究会研究大会、オンライン
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 OSAWA, Ayako
2. 発表標題 Miura Sekizo and Theosophy in Modern Japan
3. 学会等名 1st EANASE international conference、オンライン（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 赤江 達也
2. 発表標題 「三つの「二つのJ」 内村鑑三による社会の記述」
3. 学会等名 日本基督教学会学術大会シンポジウム「内村鑑三と日本のキリスト教」、オンライン
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 赤江 達也
2. 発表標題 「「メディア宗教」としての無教会キリスト教」
3. 学会等名 第4回「メディア宗教」公開研究会、オンライン
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大澤 絢子
2. 発表標題 「宗祖と戦争 悶える親鸞と戦う日蓮」
3. 学会等名 仏教文学会4月例会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大澤 絢子
2. 発表標題 「「英雄日蓮」と修養 偉人崇拜としての宗祖像」
3. 学会等名 日本宗教学会第81回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大澤 絢子
2. 発表標題 「仏教婦人の肖像 九條武子の短歌と教化」
3. 学会等名 日本学研究会第4回学術大会国際シンポジウム「近代日本の仏教と文学」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大澤 絢子
2. 発表標題 「修養と教養の岐れ道 明治から大正期を中心に」
3. 学会等名 「大正・昭和戦前期を中心とする教育と近代仏教に関する学説史的・実践的考察」第4回公開研究会（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 赤江 達也（分担執筆）、川野 英二 編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 496
3. 書名 『阪神都市圏の研究』	

1. 著者名 大澤 絢子（分担執筆）、石井 公成 監修 / 近藤 俊太郎・名和 達宣 編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法藏館	5. 総ページ数 572
3. 書名 『近代の仏教思想と日本主義』	

1. 著者名 赤江 達也（分担執筆）、島園 進・末木 文美士・大谷 栄一・西村 明 編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 春秋社	5. 総ページ数 260
3. 書名 『シリーズ近代日本宗教史2 国家と信仰 明治後期』	

1. 著者名 大澤 絢子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 NHK出版	5. 総ページ数 288
3. 書名 『「修養」の日本近代 自分磨きの150年をたどる』	

1. 著者名 大澤 絢子（分担執筆）、大谷 栄一・吉永 進一・近藤 俊太郎 編	4. 発行年 2023年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 352
3. 書名 『増補改訂 近代仏教スタディーズ 仏教からみたもう一つの近代』	

1. 著者名 赤江 達也（分担執筆）、関西学院大学キリスト教と文化研究センター 編	4. 発行年 2023年
2. 出版社 キリスト新聞社	5. 総ページ数 166
3. 書名 『ことばの力 キリスト教史・神学・スピリチュアリティ』	

1. 著者名 赤江 達也（分担執筆）、山口 輝臣・福家 崇洋 編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 336
3. 書名 『思想史講義【戦前昭和篇】』	

1. 著者名 赤江 達也（分担執筆）、キリスト教文化事典編集委員会 編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 790
3. 書名 『キリスト教文化事典』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	大澤 絢子 (OSAWA Ayako) (50816816)	東北大学・国際文化研究科・JSPS特別研究員(PD) (11301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 日本学研究会第4回学術大会国際シンポジウム「近代日本の仏教と文学」	開催年 2023年～2023年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------